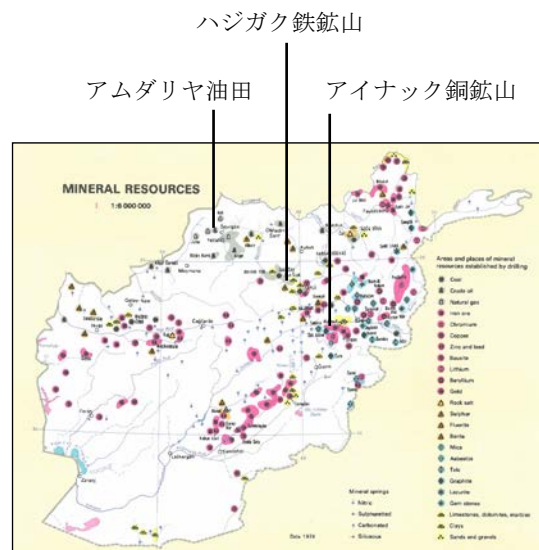


中国とインドが狙うアフガニスタンの鉱物資源

開発経済調査部 主任研究員 福田幸正
fukuda@iima.or.jp

アフガニスタンの大統領選挙の決選投票は、アブドラ元外相とガーニ元財務相の間で2014年6月14日に行われる。

破綻国家とも称される「アフガニスタン」と言われても、現時点でビジネスにどう関わりがあるのかピンとこないというのが正直なところかもしれない。しかし、最近、資源大陸として脚光を浴びたアフリカがそうだったように、鉱物資源によって、アフガニスタンも将来大きく飛躍する可能性を秘めている。



(出所) National Atlas of the Democratic Republic of Afghanistan より作成

* * *

紀元前14世紀の古代エジプト王ツタンカーメンの黄金のマスクを鮮やかに彩った瑠璃色は、アフガニスタンで産する宝石ラピスラズリを顔料にしたものだったそうだが、アフガニスタンが産する鉱物はラピスラズリだけではない。アフガニスタンの地質は、ユーラシアプレート、アフリカプレート、インドプレートという3大陸の衝突によって形成されたため、極めて複雑な構造となっている。その結果、銅、金、鉄鉱石、レアアース、大理石、宝石、石炭、石油、ガスなど、種類豊富な鉱物資源が賦存することとなった。それらは、内戦以前の1970～80年代にはある程度採掘されていたが、その後は

内戦の混乱や資金不足によって開発が進まず、生産量はその潜在力を大きく下回っている。2012年でもGDPに占める鉱業の割合はわずか1%と極めて小さい。

そのようなアフガニスタンの鉱物開発がにわかに注目を集めるようになったのは、2010年に米国防総省が米国地質調査所の調査結果を引用する形でアフガニスタンの埋蔵鉱物資源の価値を1兆ドルと発表してからである。なお、アフガニスタン政府は、これをさらに上回る3兆ドルと推計しているが、アフガニスタンのGDPはたかだか205億ドル（2012年）であることを考えると、1～3兆ドルという規模はかなり大きい。このようなことから、鉱物資源開発は、アフガニスタンが経済困難から脱却するための有力な切り札として期待されている。

しかし、1～3兆ドルといっても地下に埋まった資源の推計価値であり、短期的に収益が期待できるものは、北部のアムダリヤ推積盆（Amu Darya Basin）の石油、首都カブールの南東約40キロに位置するアイナック（Aynak）の銅鉱石、中部バーミヤンのハジガク（Hajigak）の鉄鉱石の3つに限定されるといわれている。

アイナック銅鉱山とハジガク鉄鉱山は世界最大規模の埋蔵量が推定されており、鉱山開発には、それぞれ20～30億ドル、関連インフラ整備にさらに同額、ないしはそれ以上の費用がかかるものと見込まれている。

生産が始まっているのは中国企業によって採掘が行われているアムダリヤの石油があり、アフガニスタン政府のここからの税収は、2013年に6,400万ドル、2014年には9,000万ドルにのぼると見込まれている。

2007年、中国企業はアイナック銅鉱山開発のため30年のコンセッションを獲得したが、プロジェクトの周辺には考古学上重要な仏教遺跡群も埋まっており、遺跡調査と遺跡保護のために関係者間で調整が進められることになった。さらに、2014年末の治安権限の国際軍からアフガニスタン政府への移管や、2014年4月の大統領選挙実施を控えて政治・治安情勢が不安定化する中、最近、中国企業側から事業実施の見直し要求が出された模様であり、なかなか一筋縄ではいかないようだ。

ハジガクの鉄鉱山開発は、インド企業が開発を手掛けることになったが、ここでもアイナック銅鉱山と同様、インド企業から事業実施の見直しの要求が出されているとのことである。

このように、タリバンなどの武装勢力がアフガニスタンの治安を脅かしているにもかかわらず、アムダリヤ油田、アイナック銅鉱山、ハジガク鉄鉱山に実際に外国企業が開発投資に乗り出してきたことを捉えて、基本的にこれら3プロジェクトを軸とした「アフガニスタン資源回廊戦略」（Afghanistan Resource Corridor Strategy）と称する国土総合開発計画が世界銀行の後押しで構想されている。その内容は、これら3プロジェクト用の道路や、電力、水などのインフラ整備を行いつつ、同時にプロジェクト周辺地域のインフラも整備し、加えて、周辺の農業開発や農産物加工業などの下流産業の開発も促し、雇用の促進も図るというものである。さらに、この構想に関連付けて、土地収用制度を含めた各種制度の整備や人材の育成も進め、また、地元住民の意思をくみ上げる仕組みも組み込むという、盛り沢山なものとなっている。長期的には、これら3地点を起点として開発対象地域を拡大していくことも構想している。今後、外国援助が先細りになっていくことを想定し、豊富にある国内鉱物資源を経済自立の核にしていこうという目論見だ。

ところが、前述のように、最近の政治・治安情勢の不安定化によって、アイナック銅鉱山、ハジガク鉄鉱山とも開発は足踏み状態であり、アムダリヤ油田も、操業が滞っている模様である。いずれのプロジェクトもただでさえハイリスクなプロジェクトだが、中国、インドは戦略上の重要性から、それこそ石にかじりついてでも踏みとどまるだろう。とにかく、何事も今後の治安情勢次第だ。「アフガニスタン資源回廊戦略」にしても、いくら素晴らしい構想であっても、治安の安定がなければ絵に描いた餅になりかねない。

このように、現在足踏み状態とはいえ、新興国の双璧、中国とインドが実際にアフガニスタンのようなハイリスクな国で、これまたハイリスクな大型資源開発事業に実際に投資していることが重要だ。つまり、アフガニスタンの治安の安定が両国の切実な共通利害となったということに注目すべきだ。アフガニスタンの安定のために、中国の友好国パキスタンにもより積極的な貢献が期待されるだろう。内陸国のアフガニスタンは採掘した鉱物を周辺国経由で輸出せざるを得ない。その中に、西の隣国イランがある。イラン経由でアラビア湾に出るルートについては、これまで米国は反対してきた。インドが開発しているハジガクの鉄鉱石の輸出には、対立関係にあるパキスタン経由は困難であり、イラン経由となるどころ、これを米国に反対されるとにっちもさっちもいなくなる。最近、イランの核開発を巡る欧米のイラン制裁は緩和の方向にある模様であるが、米・イラン関係の緩和はアフガニスタンの安定にとって非常に重要である。また、それはひいては米国、イラン両国の利益にも合致するはずだ。

アフガニスタンは歴史的に周囲の大国に大きく影響されてきた。アイナック銅鉱山、ハジガク鉄鉱山の開発を通して、関係国がアフガニスタンの安定という共通の利益の実現に向けて協調していくことを期待したい。その中から、インド・パキスタンの和解、米・イランの和解という歴史的な和解にダブルで結びついていけば、西アジア、中東地域全域に明るい展望が開けるだろう。そのように見ると、国際軍の撤収と大統領選挙が重なる2014年はアフガニスタンのみならず、世界にとっても極めて重要な年となるかもしれない。

以上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2014 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-Chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話：03-3245-6934（代）ファックス：03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>